

2021 年度北海道科学大学建築学科客員教授出題による建築コンペティション

主催：北海道科学大学工学部建築学科

協賛：総合資格学院

課題：オブジェ/アイコン/モニュメント

出題：竹山 聖

かつて アドルフ・ロースは「真の建築は墓とモニュメントのうちにしかない」と書いた。ネアンデルタール人が死者に花を手向け、現生人類が音の出る楽器を作り、洞窟に絵を描いた時から、人間は空間に目覚め、過去と現在と未来の概念を知り、共同体の結束を意識した。やがて身体を超えるスケールを持つ建築という空間芸術の力を磨き上げるようになった。都市が築かれ、都市の要には常に建築があった。建築という行為の根元には記憶を刻み込むという営為がある。時間と空間を畳み込むという思考がある。

建築は空間をつくりあげる技であり術である。できあがった建築物は否応なく物体であり、意味を生成し、記憶の装置となる。すなわちオブジェであり、アイコンであり、モニュメントとなる。これらの属性を肯定しようと否定しようと（否定的言説は多くの場合旧来の思想への批評として、あるいは社会への迎合として現れる）、建築物はそうした批評を超えて「存在」する。つまり物質性を有し意味を持ち記憶を纏う。単純なコミュニケーションを司る透明な記号や情報を超えた、いわば不透明で余剰的な「存在」であらざるを得ない。

建築の有する力を再確認し、その上でこの力を強め、歪め、弱め、消し、きらめかせ、輝かせ、・・・、新しい建築の可能性を再発見してみよう。「建築に何が可能か」、これは原広司が30歳の時に問いかけた問いであった。いまや新しい空間加工のイメージが問われている。オブジェ/アイコン/モニュメントという言葉に触発された空間加工のイメージを、のびのびと広げていってほしい。

敷地、プログラム、スケール：自由。

参考/「空間加工のイメージ：竹山聖のスケッチと言葉」22世紀アート

- 対象：** 北海道科学大学建築学科学部、大学院学生（4年意匠系ゼミ学生は必修/建築ラボセミナー）、学外建築学生有志
- 提出物：** 構想の表現に必要と考える図面、模型写真、透視図、図式、言葉をA1一枚にレイアウトした図面 PDF データ
- 提出要領詳細：** 後日、応募登録者に連絡

課題講評審査日程：2020年9月中旬（詳細判明次第登録者に通知）

作品講評審査： 竹山聖 北海道科学大学客員教授、京都大学名誉教授
鈴木隆之 北海道科学大学客員教授、武漢大学都市建築学科教授

オブザーバー： 川人洋志、岩澤浩一（北海道科学大学工学部建築学科教員）

応募登録及び作品提出日程： 応募登録 2021年5月30日午後5時締め切り、

作品提出日時：2021年9月上旬を予定。詳細は、後日、応募登録者に連絡。

応募登録： 下記 Google Form 様式に必要な事項を入力。

<https://forms.gle/Ub7fX2VPkoxtrVLR6>

講評審査会場： 後日応募者に連絡を行う。

顕彰： 優秀作品の顕彰を行う。顕彰作品数、顕彰賞品についての詳細は、後日、応募登録者に連絡。

問合せ： 川人 (E-Mail:kawahito@hus.ac.jp)

以上